
食堂の彼女

林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

食堂の彼女

【Nコード】

N0741B

【作者名】

林檎

【あらすじ】

誰にも相手にされない。そんな女の子の、平凡だけどちょっと平凡じゃないお話。

（前書き）

学校の帰り道、歩いている時に思いついた話です。

——とても気になっている人がいる。

小さな食堂はいつもごった返していた。風の吹く良く晴れた日にも僅かな湿気を感じるのは、おばさんが大きな釜で麺を茹でているからなのか、体育終わりの男の子達のせいなのか。クーラーが壊れて生温い空気を吐き出しているせいなのか。入り口を開け放していても、煩わしいぐらいに暑いのだ。

決してそれだけが理由でないけれど、私は食堂で昼食を食べた事がなかった。中でパンやらおにぎりやらを買って逃げるように外に出るのだ。

きっと彼女の存在が無かったら、私はあのまま三年間一度も食堂の椅子に座ることは無かったと思う。

あの日も相変わらず食堂は、ひとつの席を除いて満席でレジの前には人がごった返し、耳が痛くなる程の喧騒で埋めつくされていた。その日、私の心臓は息苦しいぐらいに鼓動していた。パンの入った袋を持つ片手が、夏だというのに不自然に震え、ひどく冷たかった。壁にくっつけて置かれている長机の端っことで、彼女は取り付かれでもしたように一心に何かを食べている。

それは私が高校に入学してからの三ヶ月間、ただの一度も変わらぬ光景だった。

彼女が居なかった事もなければ、彼女の隣に誰かが座っていることもなかった。

私はゆっくりゆっくりそこへ歩いて行った。

宙を歩いているようでもあった。

スカートの長い裾がいちいち脛に当たる感覚だけ確かだった。

震える手で彼女の隣の椅子を引いたその刹那、ほんの僅かに彼女の動きが止まった気がしたけれど、気のせいだったのかもしれない。席に着いてはみたものの、私はとてもなく後悔していた。何かとんでもないことをしてしまった気がする。背後にいる全ての人達が、私を指差している気がした。私を見て笑っている気がした。顔がかつと熱くなり、涙が溢れそうになる。

私は何を期待していたのだろう。

何も変わる訳がないのに。

情けない程みつともないこんな私が、何も変わる訳が無いのだ。

彼女は私に目もくれずオムライスを食べ続けていた。私はそんな彼女をとて冷たく感じた。付き放されたようだった。

涙を流さないように、何か他の事を考えようとしたけれど、どうしようもない恥ずかしさと恐怖だけが心を襲った。今更立ち上がって外に出ることもできないし、このままここに居るのも苦痛だった。

昼休みが終わって教室に帰ることを思うと、怖かった。

「ごちそうさま」

蚊の鳴くような声だった。

はっとして彼女を見つめた。彼女は何食わぬ顔でトレイを持ち、すっと立ち上がった。痩せてギスギスした体を気だるそうに、ゆっくりと歩いて行く。

そのスカートの裾が僅かにアイロンの匂いを残した。

私は感動していた。本当は決してそうではないのだけど、その時の私には、その言葉が自分に向けられたものであるように感じられたのだ。

しばらくして不思議に心が温かくなり、指の震えが止まった。

それは彼女の声が、とても不器用に聞こえたからだと思う。

教室に帰った時に、何か嫌な事をたくさん言われた。

「お前が居ると食堂がくさるんだよ」

それでも私が、明日もあの場所に座ろうと思ったのは彼女の『ごちそうさま』があったからだ。

彼女の耳が聞こえないと知ったのは、私が食堂で昼食をとるようになってもう随分経ってからだった。三年生だと知ったのも、同じ頃だった。

毎日同じ時間隣にいるのに、彼女は私になんの興味も示さなかった。

彼女は毎日変わらぬ姿でそこに居て、同じような物を食べ、同じぐらの時間にごちそうさまと言った。必ず私より先に居て、私より先に居なくなった。

夏休みをはさんでも冬休みをはさんでも、決して変わらなかった。

私はそれを心地よく感じていた。

誰かに悪口を言われても、クラスメイトに机を放されても、そこに行く時に私は唯一安心できるのだった。

私は彼女の横顔をよく観察していた。

真っ黒で短い髪はつやつやしていて美しかった。鼻がずっと高く、目と口が細くて頬がこけていた。

どんなに私が見つめても、彼女がこちらを向いたことは一度もなかった。

初めて他の場所で彼女に会ったのは、彼女が卒業するまで後一ヶ月という時だった。

寒い日のバス亭のベンチだった。

私と彼女以外は誰もおらず、食堂に居る時のように私は彼女の右側に座っていた。

切り揃えた短い前髪の下に、いつもと変わらぬ無表情の顔が、冬の夕日に照らされて光っていた。

私はその耳に補聴器があるのを見てとった。食堂に居る時には見たことのないものだった。

長い時間じつと眺めているのに、相変わらずちらりともこちらを見ようとしない。

——彼女は私の顔を見た事があるのだろうか？

意を決して、私はそつと彼女の肩を叩いた。指先に骨張った肩の感覚が伝わる。いつもあんなに近くに居たのに彼女に触れるのは初めてだった。

彼女は首だけをこちらに向けた。驚くでもなく、嫌がるでもなく、無表情のままだった。

「私、分かりますか？」

なるべく大きな声を出そうとしたら、うわずってしまった。

四秒程して彼女はゆっくりうなずいた。

「オムライス、好きなんですか？」

何か言おうとして口に出したのがそれだった。

今度はすぐにうなずいた。表情は崩さなかった。

「…私がいつも、横に居て、嫌じゃなかったですか？」

無意識のうちに握り締めていた膝の上の拳が、じんわりと熱い。

彼女は鞆から一枚紙を取り出すと、ペンで何かを書いて私に渡した。

『どうして泣きそうな顔をしているんですか？』

彼女が初めて私に言葉をくれた。

言いようもなく嬉しかった。胸が熱くなる。

「多分、緊張しているんだと思います。悲しいんじゃないです」

彼女は二回うなずいて、再びまっすぐ前を向いた。

やがてバスが来て、彼女は何も言わずにそれに乗って居なくなつた。

卒業式の日が来た。

とても寒い日で、その年最後の雪が静かに降っていた。

私は式の間ずっと彼女から目を放さなかった。彼女はいつもの彼女で、いつもの姿のまま、ギスギスした体を引きずるように歩いていた。入場する時も、退場する時も、最後まで同じだった。

放課後には校舎中がごった返していて、耳が痛い程の喧騒に溢れていた。

花束を持った人や泣いたり笑ったりしている人をすり抜けながら、私は彼女を探していた。

彼女はどこにも居なかった。食堂にも、バス亭にも居なかった。息を切らして走り回った私は、疲れて膝に手をついた。焦る気持ちが大きくなる。

——もう、会えないのだろうか？——

雪が冷たく皮膚を打って、息は白く残った。

息が落ち着いてきた頃、顔を上げるとそこに彼女が立っていた。静かに、私を見ていた。ほっとして私は笑った。

「良かった。もう会えないのかと、思ってたんです」

彼女はゆっくり歩いて来て、私の１メートル手前で止まった。そうして鞆から折りたたんだ一枚の紙を出して、私に差し出した。

その目は静かに私を見つめたままだった。

私がそれを手にすると、彼女はきびすを返して歩き始めた。

「あの、ありがとうございました」

私は半ば叫ぶように言った。

彼女は振り返りもせずそのまま歩いて行った。聞こえていないのかもしれない。

家に帰って、彼女にもらった紙を広げた。そこには綺麗な文字が並んでいた。読む途中、文字がぼやけては現れ、ぼやけてはまた現れた。

『私は人間が嫌いです。耳が聞こえなくなってから嫌いになりました。みんな私が何も知らないと思っていますのです。私は本当は全部知っています。何でも全部知っています。』

補聴器を外せば音が聞こえなくなります。

私は食堂では一度も補聴器をつけた事ありません。そうまでして食堂に居たのは、単にオムライスが好きだったからです。音のない食堂は、悪いものではありません。私は人間が嫌いです。これからもずっと嫌いなのだと思います。あなたのこともよくわかりませんが、横に居るのは嫌じゃありませんでした。』

高校を卒業するまでの二年間、私は何度もこの手紙を読み返した。食堂の椅子に座って。

（後書き）

集中しすぎて、書き終わった時に熱を出してしまいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0741b/>

食堂の彼女

2010年10月11日15時34分発行